

中国における仏教の伝播経路に関する実態調査

平成二年度調査報告書

鎌 田 茂 雄

れば幸いである。

国際学術研究「中国における仏教の伝播経路に関する実態調査」の平成二年度の調査地域は陝西省である。

陝西省は広大であるが、仏教寺院、塔、仏教遺跡が数多くあるのは、西安市、長安県を中心とした陝西省の南半分であるので、本年度は主として、咸陽市、周至県、盧県、扶風県、岐山県、麟遊県、彬県、長武県、耀県、涇陽県、高陵県、韓城市、西安市、藍田県、長安県などの寺院、塔、石窟寺院址などの調査を実施した。

以下、調査の順序に従つて、各地域の寺院、塔、石窟、博物館、史跡、仏教遺址などの概略を述べておく。なお重要な寺院、塔、石窟などについては、各研究分担者の調査報告が収録されているので、その報告書を参考にして頂け

中國の陝西省の省都である西安市は昔の長安である。長安は陝西省の中でもっとも有名な文物勝地の一つである。長安は陝西省の閩中平原の中部に位置し、北は古城長安に接し、南は寧陝、柞水に、西は盧県、咸陽市に、東は藍田県に接している。長安県が始めておかれたのは後漢の劉邦が都をこの地に定めた時である。長安は周、秦、漢、唐など十一代の王朝の都として栄えた。秦が中国を統一して以後、全国の政治、経済、文化の中心であった。

今日の西安市には名勝古跡、歴史文物など多くのものが

中国における仏教の伝播経路に関する実態調査（鎌田）

中国における仏教の伝播経路に関する実態調査（鎌田）

存在している。西安市の郊外には、觀音山、青華山、翠華山、南五台、小五台など多くの名山があり、そのあいだには仏寺が林立している。まさしく中国仏教の発祥地の一つである。昔は「長安三千金世界、終南百万玉樓台」といわれた。長安や終南山の麓には金色に輝く瓦をふいた楼台が立ち並ぶ、たくさんの仏教寺院があつたことを詠つたものである。

現在、西安市の内外には四十余りの寺院や道觀（道教の廟）があるといわれる。仏教寺院としては興教寺、香積寺、淨業寺、豊德寺、天池寺、興慶寺など多くの寺院があり、仏教の八大宗派の中で、法相宗、淨土宗、律宗、華嚴宗の四大宗派はこの長安からおこつてゐるのである。

これらの長安の仏寺は、ほとんど隋代から唐代にかけて成立している。隋唐時代は長安が東アジア世界の政治や文化の中心であり、また、シルクロードの終着点であつたために、長安は東西文化の交流地でもあった。

東アジア仏教圏の中心であった長安には、朝鮮、日本などから多くの留学僧が唐の都、長安を目指した。高野山を開いた空海や、比叡山を発展させた円仁など、多くの日本

僧が長安の寺に滞在し、唐の仏教文化を学び、それを日本に伝えたのである。日本との関係で有名な寺としては、空海が留学した青竜寺、円仁が訪れた大興善寺を始めとして、多くの寺院がある。

長安には仏寺が数多くあつたが、長いあいだに破損したり、焼失したりしたため、現在、保存が良好なのはあまり多くはない。そのなかで歴史的に有名ないくつかの寺院や道觀をとりあげて、特に今回調査した寺院や道觀について報告しておきたいと思う。

大興善寺

大興善寺は西安市の南二・五キロにある。大興善寺は泰始年間から泰興年間にかけて創建されたといわれる。隋の開皇年間、インド僧の那連提黎耶舍、闍那崛多、達摩笈多などがこの寺に来て、經典を翻訳し、有名になった。とくに隋の文帝はこの寺を重視し、国立大寺院として仏教界の中心にしたために大いに栄えた。

唐の開元四年から八年にかけて、インドから中国へ密教を伝えた善無畏、金剛智、不空三藏がこの寺において五百

部余りの密教經典を翻訳したので、この寺は密教の中心道場となつた。日本の留学僧もこの寺に滯在しているのである。

唐の時代の建物はすべて破壊されてしまつたが、唐代のものとしては、わずかに石竜頭と歴代の重修の碑石が残存しているだけである。

現在の建物はすべて明清時代の建築であり、一九五六年に全面的に修理されている。仏殿、禪堂、配房、鐘樓、鼓樓などが現存している。

正門を入ると、その裏に「五岡唐鎮」と書かれた扁額が懸かっている。五岡唐鎮とは、終南山の一峰である南五台山から長安の町までに五つの岡があるといわれており、この大興善寺のある岡はその第五番目にあたる。鎮とは町のことである。山門を入るとすぐ脇に、この大興善寺が陝西省の重點文物單位に指定された標識が立つてゐる。この標識には「興善寺」と記されていたが社会科学院歴史研究所の王先生の意見で大の字が加えられ、現在は「大興善寺」というのが正式の寺名となつてゐる。

それは隋の文帝がこの寺を大興善寺と名づけたからである。

天王門を入ると、両側に四天王が、まんなかには布袋像がある。天王門を抜けると右側に鼓樓、左側に鐘樓がある。そして松柏のなかに大きな碑石がある。左側の碑石は、明の洪武年間に書かれた「釈迦如來雙跡靈相圖」というものである。

大雄殿に入ると、中心の壇の上には三世仏が祀られている。その前の聯には「開元三大士渡海」と書かれていた。開元三大士とは先に述べた善無畏などの三人のことである。大雄殿の両側には十八羅漢が配されている。

大興善寺の建物の配置法は、五進法に準じて行われている。五進法とは南北の軸に五つの殿宇を並べた配置法である。そのため大雄殿の背後にも二つの建物が建てられてゐる。

現在、大興善寺は公園として解放され、中国の人々も観光と遊覽のために訪れている。

青 竜 寺

中国における仏教の伝播経路に関する実態調査（鎌田）

の重要な寺院であり、日本の空海が訪れたところもある。

青竜寺は隋の開皇二年（五八二）に建立され、始め靈感寺といわれた。一時、廃絶されたが、唐の龍朔二年（六六

二）觀音寺として再建されて、景雲二年（七一二）青竜寺と名づけられた。唐の会昌五年（八四五）、廢仏によつて廃毀され、その後衰微するに至つた。

一九五六年、陝西省人民委員会は青竜寺遺趾を文物保護の場所に指定した。一九八二年西安市人民政府はこの場所に文物管理所を設け、中国社会科学院の考古研究所は二回にわたつて青竜寺遺趾を発掘し、門址、塔址、殿堂、廻廊などの遺蹟を発見した。出土した文物には蓮の花紋様の煉瓦、鴟尾の残片、鎏金の小仏像、唐三彩の仏像の破片、經幢などがある。これらの文物は青竜寺の歴史を研究する上できわめて重要なものである。

中国の仏教がもつとも発展したのは唐代である。唐代の密教の高僧、惠果が住した青竜寺は、密教の中心地として栄えたために、中国の僧以外、日本や新羅などの多くの僧が留学してきた。日本佛教史で有名な入唐八家のうち六家までも青竜寺で学んだのである。六家とは、空海、円行、

恵運、円珍、宗睿の六人である。中でも空海がもつとも有名である。

八〇四年、日本の遣唐使に従つて長安にきた空海は、始めは西明寺にいたが、その後、青竜寺の惠果より密教を学んだ。密教のすべての传授を受けた空海は、八〇六年日本に帰り、真言宗を開いたのである。彼は仏教のみならず、中国の文字、書道、天文、医学などの知識を日本に伝え、日中文化交流に大きな役割を果したのである。

現在、青竜寺には日中友好につくした惠果および空海を紀念して、惠果空海紀念堂ならびに空海紀念碑が建立されている。

一九八二年二月に建てられた空海紀念碑の碑文の冒頭には「中日両国一衣帶水、友誼淵遠」と書かれている。ついで空海の簡単な伝記を述べ、最後にこの碑が日本の香川、愛媛、徳島、高知の四国四県の協力によつて立てられたことが記されている。この碑文を撰したのは、陝西省社会科学院歴史研究所の暢耀先生である。この碑の材料は漢白玉である。碑の形は日本の四国で設計図を作つたものである。この塔は中国の伝統的な密檐式塔を模したもので、塔の周

りの浮彫は空海の渡海を描いたものである。塔の前の花壇には日本の桜の木が植えられている。またその前にある建

物は唐代の寺院建築を模して再建されたものである。

恵果空海紀念堂の庭にも一九八五年、四国から贈られてきた桜が植えられている。青竜寺の遺址は紀念堂の前の芝生が植えられているところであるという。紀念堂の中央の扁額には、中国仏教協会の会長、趙樸初先生が書いた「惠果空海紀念堂」の文字がみえる。なお、大殿の前には、この紀念堂が建てられたいわれが書かれた石碑が建てられている。

紀念堂の中には、空海と恵果が祀られておりその前には密教のごま壇があり、その上には法具がおかれていた。またかつての唐代の立派な青竜寺が壁に描かれている。なお大殿の隅には、遺址から発見された仏像などの出土品が置かれていた。

青竜寺遺址から約三〇〇メートル離れた畠の中に、十五年前に訪れた時目にした「青竜寺遺址」と書かれた石碑が立っていた。昔はこの石碑だけが青竜寺のありかを示す纪念碑であつたが、今や空海紀念碑や紀念堂が建ちならび、

立派な観光地となつてている。

興 教 寺

興教寺は長安県の樊川の少陵原にある。西安市から南約二〇キロの岡の上にあり、樊川を望んで、終南山玉案峰に對している。

山門の額には「護國興教寺」と書かれている。この寺は法相宗の寺として有名である。この寺に唐の高僧、玄奘（六〇二—六六四）の遺骨が埋葬されている。寺は唐の高宗の總章二年（六六九）に創建された。この興教寺には玄奘の外、彼の二人の弟子である新羅の円測と慈恩大師基の墓塔もある。

興教寺は、清代に兵火にあい、三つの墓塔を除いてすべては焼失した。一九二二年以来、寺院の建物が再建され、三つの塔も補修された。解放後、興教寺は全国重點文物保護単位に指定され、一九八三年以来、全面的に修理がなされ、現在は西安市の一つの名勝となつてている。

現在の興教寺は殿堂、経樓、塔院の三つの部分から成っている。殿堂としては山門、鐘、鼓樓、大殿、法堂、禪堂

中国における仏教の伝播経路に関する実態調査（鎌田）

などがあり、とくに大雄宝殿の額には康有為が書いた「興教寺」の三字があざやかに見える。

東院には大きな蔵經樓がある。この中には多くの經典が収藏されている。この蔵經樓に登つて前方を見ると、巍々たる山峰を連ねた終南山系がかすんで見える。

松柏が茂るなかに西院がある。西院は塔院といわれるようく玄奘などの墓塔がある。まん中の玄奘塔は高さ二三メートルある舍利塔で、重要な文化財の一つである。この塔の内部には玄奘の塑像がある。塔の背面には劉軻が書いた「大唐三藏大遍覺法師塔銘」の碑文が刻まれている。玄奘塔の西側には慈恩大師基の墓塔、さらに東側には円測の墓塔がある。二つとも高さ七メートルの三層塔である。三塔の北には慈恩殿があり、殿内には玄奘、基、円測の三人の石像碑がある。

香積寺

長安県の神禾原の西に千年古刹の香積寺がある。この寺は中国の淨土教の淵源となつた寺の一つである。寺は滻河と滻河の交流点の丘にある。唐代の有名な詩人王維の「過

香積寺」という詩がある。

香積寺は唐の高宗の永隆二年（六八一）に建立された。寺内には善導大師の供養塔がある。この塔は高さ三十三メートルあるが、塔頂の部分には縦に大きな亀裂が入つていた。善導塔より東側に小さな塔があるが、これは善導の弟子の淨業の墓塔である。

宋元時代、香積寺は荒れるにまかせていたが、明清時代、さらに兵火にあい、寺内の多くの建物は焼失した。一九六五年に陝西省重点文物保護単位に指定された。一九七九年には新しく大雄宝殿が建てられ、善導塔も修理された。その後法堂、客堂、念佛堂、僧房などが建てられ、現在では大きな寺院となつている。

香積寺は日本の淨土宗と密接な関係があり大雄宝殿の中には日本の淨土宗から贈られた善導大師の坐像が安置されている。また善導塔の中にも日本の淨土宗から贈られた善導、法然二祖対面像が安置されている。

香積寺の境内には、唐代の石刻陀羅尼經幢、および石碑、碑額などが保存されている。

終南山 豊徳寺

長安県の灋峪の入口の東の山の上にあるのが豊徳寺である。灋峪は終南山から流れ出る渓谷である。入口には小さなお堂が立つており、そこを通つて山へ登つてゆく。豊徳寺のあるところから前方の高原を望むと、遙か彼方に草堂寺が見える。寺の前には麦畠があり、一人の尼僧が畠仕事をしていた。畠の隅にはたくさんのお墓塔が立ち並んでおり、墓塔には尼僧の戒名が書かれていた。

寺碑によると、この寺は唐の高宗の永徽年間（六五〇—六五五）に創建されたといわれる。ただしほんとうの創建はもう少し早く、初唐の高僧、智藏、道宣、円測などがこの寺に住したといわれる。寺内にはもと道宣律師が建立した戒壇があったといわれる。この寺は道宣律師が律宗を宏揚した道場として知られている。円測が洛陽の仏授記寺において六九六年に没したとき、この豊徳寺の山丘に分骨され、宋の政和五年、さらにこの豊徳寺から興教寺の玄奘三蔵の墓塔のそばに分骨したのである。

中国における仏教の伝播経路に関する実態調査（鎌田）

一九六〇年この寺は尼僧の寺となつたが、文革のときに、殿堂や文物が破壊されてしまった。一九八六年、大雄宝殿を新築し、寺の建物を修復した。

山門を入ると、すぐ前に荒れはてた弥勒殿がある。弥勒殿と大雄宝殿のあいだにはよく整備された庭があり、古木の柏樹や草花が植えられている。

正面の大雄宝殿のなかには、釈迦、阿弥陀、薬師の三尊佛と、觀音、文殊、普賢、地藏の四菩薩像が祀られている。壁には道宣律師の生涯を書いた絵が書かれており、道宣律師の寺であることが示されている。

寺の境内には清代の碑石や三つの墓塔があり、歴史の古さを物語つてている。現在、尼僧が二十人ばかり住んでいるということである。

華 嶴 寺

華嚴寺は長安県の韋曲鎮の東南の少陵原の丘の上にある。南は樊川に臨んでいる。華嚴寺の遺址に登ると、少陵原が一望の下に眺められ、はるか彼方には終南山峰が連なつているのが見える。

中国における仏教の伝播経路に関する実態調査（鎌田）

華嚴寺は『長安志』や『咸寧県志』によると、唐の太宗の貞觀中（六二七—六四〇）に創建された寺であり、中国の華嚴宗の発祥の地である。清の乾隆年間、少陵原の附近で土砂が崩壊し華嚴寺の殿宇はすべてこわされ、わざかに二つの塔だけが残された。この二つの塔とは華嚴宗の初祖杜順と第四祖澄觀の墓塔である。もとは五つの塔があり、

華嚴宗の五つの祖師の塔があつたが、現在は二塔だけが残っているにすぎない。さらに、澄觀の塔の前の断崖がくずれたために澄觀の塔が傾斜したので、一九八六年から一九八八年にかけて国家の補助金で澄觀塔を補修した。現在は、もとの場所から東南へ約十メートル移された場所に立っている。

大 雁 塔

大雁塔は西安市南四キロの慈恩寺内にある。あたりはすっかり整備され、曲江園や唐芸術博物館が完成していた。

大雁塔の門の前の通りも拡大され、駐車場や土産店、写真館などが立ち整び、数年前とは面目を一新した。

入口の牌楼には「大慈恩寺」の扁額がかかげられ、右の

柱聯には「登臨出世界七層摩蒼穹」、左の柱聯には「唯識耀華夏師尊大乘天」と書かれていた。また門扉には「莊嚴國土」、「利樂有情」の四文字が鮮かに見える。

牌楼を入れるとまんなかに大雁塔が聳えている。このあたりで紀念写真をとる人が多い。すぐ左には大雁塔の見取図と説明の案内板が立っている。

鐘楼と鼓樓とを左右に見ながら通むと、中軸線上に大香爐が置かれている。「萬年宝鼎」と書かれた大香爐は一九八八年にできたものである。左側には大慈恩寺史蹟陳列室がある。

境内もすっかり整備され、牡丹が植えられた庭園が左右に並び、その中央を通つて行くと石段がある。石段の上の両側には二頭の獅子が立ち、中央には一九八九年に造られた大香爐が置かれている。この石壇の中央に大雄宝殿が立ち、大雁塔の四層以上がその屋根の背後に聳えているのが見える。

大雄宝殿の扁額は趙樸初氏の書いたものである。右の柱聯には「法界仰奘公西土亦称大遍覺」、左の柱聯には「宗學宏唯識此地堪比那爛陀」と書かれていた。この柱聯は大

慈恩寺住持の寛宗法師が敬献したものであるという。

大雄殿のすぐ左前には大悲心陀羅尼経幢が立っている。

法師玄奘

敬造釈迦

さらに左を見ると、「雁塔題名記」と書かれた碑石があり、大雄殿の左一帯は新しい堂殿を造るための基礎工事が行われていた。

大雄殿の右側には清の道光十二年四月に建てられた「重修慈恩寺碑記」と「重修大塔寺遇仙橋記」の石刻がある。後者によると、慈恩寺の前には溪流があり、遇仙橋という橋があり、その橋を重修したときの記録である。

大雄殿のなかに入ると三尊仏が中央に祀られ、両側の壇には十六羅漢が祀られている。右側の一番奥には『法住記』を書いた慶友が、左側の一一番手前には玄奘が祀られている。左右両端の二体の仏は、文殊と普賢の二菩薩である。

大雄殿の次には資料室がある。この室には大慈恩寺で最も重要な文物がある。それは玄奘が供養のために敬造した仏像の台座である。一九五六年、陝西省の宜君県の五華寺から出土したものでつぎの銘文がある。

大唐龍朔
二年三歲

玄奘自ら供養のために建造した仏像があつたことがわかる。『玄奘法師資料全書』の資料とつきあわす必要がある。この仏座こそ貴重な文化財といえる。

この資料室の右の隅にも「出土仏座」と書かれた台座が置かれていた。右の壁面には円測、玄奘、基の三法師の影像の拓本が貼られていた。(原物の碑石は興教寺にある)

左側の壁には「玄奘年譜」と玄奘の伝記が書かれていた。玄奘の生年を六〇二年としているところから、中国側では六〇二年の生年を定説としているようである。

入場料を払って大雁塔の上に上がる。大雁塔の本名は慈恩寺塔である。慈恩寺は唐の高宗李治が母親の追善と冥福とを祈るために創建したものである。唐の永徽三年(六五二)、玄奘はインドから持参してきた經典を保護するため、高宗の援助により、寺内の西院に塔を創建した。初め塔は五層、高さ十八丈で西域の仏塔形式に模して造られた。ついで武則天の長安年間(七〇一—七〇四)に、青磚を用い

て方形樓閣式の七層を造つた。その後、何回も重修が加えられ現在のような塔になつた。台座と塔身をあわせると総高六四メートルある。塔の基座は東西四五・九メートル、南北四八・八メートル、高さ四・二メートルある。

塔の南面の両壁には有名な、唐の太宗の撰した「大唐三藏聖教序」と、唐の高宗の撰した「大唐三藏聖教序記」の石刻がある。撰者は初唐の大書道家褚遂良である。その字体は秀麗であり、後世に残る名碑といわれている。

大雁塔の北には現在、曲江春曉園と、唐芸術博物館が開設されている。春曉園のなかには大慈恩寺の遺址があり、そのあたりには牡丹がいっぱい植えられている。現在の慈恩寺は昔の西院にあたるという。そこには大雁塔の西門にある仏・菩薩の石刻がそのまま模写されておかれていて、中心には仏が、その左右には五人の菩薩が、さらにその両側には供養人の姿が見える。

臥竜寺

西安市碑林区の陝西省博物館のすぐ近くにある。創建は住持の話では、隋代であり、感應寺と名づけられ、唐代に

なつて臥竜寺と呼ぶという。

臥竜寺の入口の門を入れると山門がある。山門の柱聯には「境寂聞天籟」とか「心空転法輪」などと書かれているが、周囲は人口の密集した西安城内の一画である。入口には解脱門と書かれた門がある。解脱門には光緒二十九年、培林が書いた「勅建十方臥竜禪林」いう扁額がかかげられ、この寺が清代には勅建寺院であつたことがわかる。

山門を入ると弥勒殿らしきものが見え、その前には四つの碑石が置かれていた。二つの碑石には「光緒二十七年八月二十一日」の日附が入り、「臥竜寺住持僧空齡敬謹刊立」と書かれていた。そのほか「臥竜寺碑記」と書かれた碑石（光緒二十七年八月建立）もある。

弥勒殿のわきを通り抜けると正面に大雄宝殿、右に客堂、左に配殿がある。一九八七年に「大雄宝殿」と書かれた扁額は趙樸初氏の撰書であり、この寺が文革で破壊されたあと、復旧中であることが明らかである。

大雄殿の中に入ると、中央に阿弥陀仏が、右に文殊、左に普賢菩薩が祀られ、さらに迦葉と阿難が立っていた。本尊の背後は地蔵王菩薩であり、普通の寺とは異つていた。

また普通は大雄殿の中は十八羅漢が両側に祀られているが、この寺には各種の天王が祀られており、特殊な形態をとっている。大殿の左側には、(1)帝釈天王、(2)東方持国天王、(3)西方広目天王、(4)質多羅天王、(5)大弁天王、(6)韋天將軍、(7)菩提樹神、(8)月宮天王、(9)知足天王、(10)閻摩羅天、

(11)鬼子母天、(12)摩利支天が祀られていた。摩利支天は四本の手をもち、鬼子母天は赤児の像を抱いていた。また、大殿の右側には入口から順次、(1)大梵天、(2)南方增長天、(3)北方多聞天、(4)金剛密迹天、(5)散脂大將、(6)堅固地神、(7)功德天、(8)月宮天、(9)耆婆天王、(10)婆竭羅龍王、(11)妙善天王、(12)摩首羅天王が祀られている。文革で破壊された後、修復されたものであるから、いづれも新しい像である。仏壇の前の香爐が臥竜寺の宝物の一つであると住持はいう。仏壇には「万徳円融」と書かれた垂れ幕があった。

大雄殿の左の庭には、清末に西太后からの下賜金で造つたという石の碑楼の一部である石刻がおいてあつた。住持はさらに大雄殿の後ろの配殿に案内してくれたが、その地面にある一つの碑石を指し、これが易の八卦の模様をかいた昔の臥竜寺の宝物の一つであるという。

大雄殿の背後には斎堂があり、ちょっとのぞいて見ると、整々とした食卓に僧たちの椀が並んでいた。三十三人の僧がこの修復中の寺で修行中であるという。斎堂の背後には禅堂があるとのことである。

碑林

西安市三学街にある碑林、すなわち陝西省博物館はあまりにも有名である。宋の元祐五年（一〇九〇）、唐の開成石經を保存するために建立されたものである。中国第一の書道芸術の宝庫として西安を訪れる人士の必ず訪れるところである。本稿では碑林の概況について述べるのではなく、佛教関係の石刻について報告しておく。

碑林ではたまたま漢—唐シルクロード文物展が開かれていた。そのなかには多くの仏像と仏頭が展示されていた。北魏から唐にかけてのものである。釈迦が外道のときの仏像という興味深いものがあつた。右手を高くあげその上に丸いものがあり、左手は垂れて、その先に右手と同じものがあつた。二頭の獅子を従えた唐の観音立像も珍らしいものの一つであつた。壁には大きな新疆博物館所蔵の東漢末

中国における仏教の伝播経路に関する実態調査（鎌田）

の飛天図があつた。飛天の身体は太く、乳も大きく立派であつた。

仏像には、北魏太和二十年（四九六）の石天郁造像、北

魏太昌元年（五三二）の大魏造像、北魏の迦葉像、西魏の菩薩像、北周の沙石仏造像、同じく北周の白石造像、隋の白頭景造像（道教像）などがあつた。そのほか新疆、拜城

県の克孜爾千仏洞三八号窟から出た晋の仏龕頂部説法図、

麦積山石窟の第七六号窟の藻井飛天壁画（北魏）や、同じく麦積山二六号窟の最後説法壁画（北周）などが展示されていた。

また、碑林の石刻芸術を展示する陳列室には、前にも何回か見たことがあるが、多くの仏教石刻や仏像などがある。たとえば、北魏景明二年（五〇一）の一仏二菩薩、北魏の双龕仏造像、北魏景明（五〇〇—五〇三）の劉保生造像、北魏の皇興五年（四七一）の仏像、北魏の弥勒像、北魏普泰元年（五三一）の普泰造像、北周の釈迦像、普泰元年（五三一）の朱輔伯造像、隋の弥勒菩薩像、北魏の延昌元年（五一二）の朱双熾造像、隋の觀音菩薩像、唐の菩薩像、隋の四面仏像、唐の持弓天王像、唐の觀音菩薩像、唐の虚

空藏菩薩像、唐の馬鳴大士像、（馬鳴説法図）、唐の金剛力士像、唐の釈迦牟尼像、唐の石燈、唐の残仏像、唐の樂舞仏座、老君像などが陳列してあつた。

私が特に興味をひかれたのは、法藏仏座である。唐の中宗の神龍二年（七〇六）に華嚴宗の法藏が造像したもので長安県の華嚴寺に収蔵されていた。博物館の説明文はつぎの如くである。

西崇福寺和尚法藏所雕的玉菩薩像座、上沿刻有題記、周囲刻有人面、獅頭和肩抬石坐的力士像、神態各異。

西崇福寺和尚の法藏が雕した漢白玉でできた菩薩像の台座であるという。上沿に題記が刻されているといわれるが、題記の中でみえる字は「鮮」と「藏」という字だけであり、解読することはできない。周囲に刻された人面は、法門寺の地下宮殿の靈帳にあつた不思議な顔とそっくりである。

そのほか陳列室の外の庭にも多くの仏像や石刻がある。例えば、前面は仏と二人の弟子、背面は道士像があるような石刻や、たくさんの中仏が刻された万仏石刻、一仏二弟子二菩薩二護法神の石刻、この石刻の下部には礼拝図が描かれ、つぎの文字だけを読みとることができたが、意味は

不明である。

□將軍銀責光祿大夫□陽□ □建県開国子高子路名
遠……

この石刻の裏面には邑子の名前が並べられていた。

また上段が交脚弥勒、下段が阿弥陀仏のものがあつたり、仏道二教の混淆をあらわす仏老並座の石刻もあつた。前面には脚が普通の半跏像とは反対に組まれた半跏像が刻された石刻は、実は三階教のものであり、裏面には「皇唐三階大徳禪師碑」と刻されていた。

八仙宮

八仙宮は西安市東閻長樂坊にあり西安市最大で道教信仰

の盛んな道觀である。入口には多くの縁日の商店が店を出し、参詣の民衆の雜踏で活気にあふれている。東京の浅草観音のような雰囲気がただよい、現世利益の生きた靈場である。

八仙宮は昭予莊誠壽恭欽獻崇熙皇太后萬寿碑」と書かれ、他の一つは「重修西京萬寿八仙宮碑記」と書かれていた。後者は中華民国二十七年六月に撰文されたものである。

大殿の前では信者の燃やす蠟燭と線香と、絶えず鳴る爆竹の音ですさまじいばかりであった。大殿のすぐ前では、たくさんの信者が黄色い紙を机の上にひろげて、両手で気を集めるようにし、礼拝してから火に燃やしていた。悪気を払うためか、幸福の氣を集めるためか。あるいは無形の仙薬を集めためであろうか。

この八仙宮は八仙庵ともいわれ、宋代に創建され、明代に隆盛となつたといふ。家内安全、病氣の平癒などの願いをこめて、たくさんの信者が集つてくるのである。文革時

には壊滅的な破壊を受けたのに、今や昔日以上に隆盛となつてゐる。

入口を入ると一番前の山門らしきものは、現在新築中である。雜踏の中を歩いてつぎの殿堂の前へ行くと、民衆が群れ集つている井戸がある。井戸のなかへお金を投げ入れて浮かべ吉という占いに熱中していた。ふりかえつて殿堂の扁額を見ると「道法參天地」と、書道家の米芾の書が掲げられていた。

殿庭の両側には石碑が二基ある。

一つは「慈禧端佑康頤昭予莊誠壽恭欽獻崇熙皇太后萬寿碑」と書かれ、他の一つ

は「重修西京萬寿八仙宮碑記」と書かれていた。後者は中華民国二十七年六月に撰文されたものである。

大殿の中へは信者を一切入れない。入口には道士が坐り、

中国における仏教の伝播経路に関する実態調査（鎌田）

供養の賽銭が入ると鐘を打っている。写真を取ろうとしたら叱られた。

五進院の一番奥には后殿があり、后殿の入口の左右の扁額には、右側に「道法自然」、左側に「永浴神恩」と書かれていた。

后殿の中には八仙が祠られていた。八仙とは藍采和、何仙姑、李鐵拐、曹国舅、張果老、韓湘子、鐘離権、呂洞賓のことである。中央の太上老君の左右に四人づつ並んで祠られていた。后殿の左右には、功德を捧げた人の氏名と金額が書かれた赤い紙、すなわち「功德榜」が貼ってあった。后殿の左右の聯には、右側に「柱殿彷琳宮竦箔銀屏百二閥河凝端色」、左側には「興章垂柱下琅函玉軸五千道德著名言」と書かれていた。

后殿の殿庭の前には石段と低い塀があり、その前に大きな香爐が置かれている。后殿の左側には西安市道教協会が設けられ、八仙宮が西安市の道教の中心であることがわかる。

后殿から右へ入ると琳宮である。琳宮の殿庭も線香の煙、蠟燭の火、爆竹の音、雜踏する民衆で足のふみ場もないく

らいである。琳宮へは内部まで人が入れる。人々は熱狂的に祈願をこめている。殿内の左右の壁には、東岳廟で見たのと同じような清新しい壁画が描かれていた。「呂祖洞」と書かれた扁額から、ここの中神は呂洞賓である。

中には二人の道士がいた。琳宮を出た右側の石壁に「本文錄自金蓮正宗仙源像伝」が刻されていた。一九八七年四月吉日とあり、王溪遊人の敬錄にかかる呂洞賓の伝記である。なお琳宮の配殿のところの壁には「孫思邈伝」が刻され、藥王山の孫思邈が八仙宮においても尊崇されていることがわかった。

東 岳 廟

東岳廟は西安市東門内の北に位置する。東岳は泰山を指し、岱宗とも岱山とも呼ばれている。歴代の統治者は「山高有靈」という信仰にもとづいて祭を行うので、東岳廟は全国に拡がるようになった。

西安市のこの東岳廟は未公開の文物であり、外国人にも中国人にも見せないという。廟は現在小学校の中にある。校庭に一步足を踏みいれると、小学生が群がってきたのに

は驚いた。

東岳廟は大殿と后殿よりなる。大殿に入ると周囲の壁はすべて壁画である。この壁画は幅一〇メートル、高さ五メートルぐらいはある。描かれた時代については、宋から元代のもの、あるいは元から明代のものというように二説があるが、絵画の技法から判断して明代のものと考えるのが妥当であるという。壁画のなかで、向って左側の正面下段の部分は道教と関係がある絵画、すなわち、老子像と二名の道士が描かれているが、その他の部分は道教とはまったく無関係であるという。何かの物語りを部分部分に描き分け、全体のつながり、関連は不明のことである。

ほとんど破壊されたままの大殿の入口の三門の上には、

城 隍 廟

それぞれやっと読みとることができるような扁額の文字が残っていた。中央には「帝出平震」、右側には清の乾隆帝の御筆で「威震永鎮」、左側には咸豐帝の字で「感靈遠被」と書かれている。この大殿の斗栱の下には竜が造られ、それぞれの竜の下には象、亀、鶴、猿などの動物が彫刻されていた。

小学校の校舎になつてゐる配殿の真中に后大殿がある。

中国における仏教の伝播経路に関する実態調査（鎌田）

中へ入ると、宋代から元代までに書かれたという大壁画が建物いっぱいに展開していた。一番古い宋の壁画は右側の壁の入口に近い部分にあるが、その一部分が見えているにすぎなかつた。左側の壁の上部が下部よりも古いものという。松と山がいくつか描かれていた。

この壁画の内容も何かの物語から出たようなものであるらしく、その当時の人物や生活などが描かれている。ある学者は、技法の面から前の大殿の壁画と同じく明代のものではないかと推定しているとのことである。

中央の神壇には、呂洞賓を祀つていたといふ。

西安市西大街路の北に位置する。現在はその周囲は市場になり、人々が雜踏していた。城隍廟商場と書かれた市場へ入つて、両側の商店の間を通り抜けると城隍廟の入口の門がある。門を入ると左右に小さな配殿がある。正面にあるのが樂舞楼である。この楼の檐はそり気味であり、古代建築物としては、陝西省では珍らしいものである。木彫りの模様が美しい。

「有感有応」と書かれた扁額のある牌門は堂々として、

すばらしいものである。その構造も特異なものとして知られている。裏側には「聰明正直」と書かれた扁額がある。

奥の大殿は清の雍正元年（一七二三）に創建されたもので、屋根は琉璃瓦でおおわれている。この大殿の正面入口

の門扉には竜、きりん、蓮の花などが美しいぬき彫で彫らされている。この花紋の彫刻はすぐれた芸術作品といわれ、芸術家が愛好するものである。この大殿の中は倉庫のようでは、何も遺物はないが、左の端に、大殿の須弥壇の下にあつた明代の浮彫のある石刻が置いてあつた。須弥壇の上段の中心には全真教の開祖王重陽の神像があり、その両側にはそれぞれ五人の供養人が彫られていた。中段には花紋が彫られ、下段の両側には護法神や道教の行事をあらわすさまざまなもののが、五組浮彫されていた。清の雍正年間に造られたものといわれる。

城隍廟の背後の現在、廟后街の税務所になつてている庭の一部には石碑が一つ埋まっているという。

清真寺は化覚寺とも、俗称東大寺とも呼ばれているが、西安市の西北隅の化覚巷内にある。陝西省第一のイスラム教寺院である。清真寺の近所には、イスラム食堂が多く、この附近にイスラム教徒が多く住しているようである。清真寺への道路には土産物屋が並んでいる。

清真寺の殿堂は広大な敷地に東西一直線上に五進院の形態をとつていて。省心楼や礼拝殿など、すべてで十四の殿宇がある。主たる建築は五間樓、省心樓、鳳凰亭、礼拝殿などである。現在のものはすべて明代の創建である。この寺の住持の説明では、唐代に創建されたというが、この地区は唐代には長安城の中だから宗教寺院を建てることができぬはずである。明代創建というのが正しい。この清心寺はイスラム教と中国の伝統文化とが融合した寺院としては有名である。建物は中國式であるが、藻井と神龕などはイスラム教のものである。仏教や道教の寺院は、文革中に破壊されたが、この寺はイスラム教の寺院であるため破壊をまぬかれたという。

牌坊には木材で造られた浮彫があり、明代建築の粹を集めたものであるといわれる。この寺は前後二つの部分に分

かれている。五間楼には「清真寺」の扁額が、また、前大殿には「勅賜礼拝寺」の扁額がかかげられていた。大殿の内部の扁額には「派衍天方」と書かれており、住持の説明ではイスラム教の聖地からきたイスラム教という意味だそうである。殿内には重要な碑石が置かれており、とくに左側の中央にある「清真月碑」と書かれた碑刻は、この碑の記述によつて、信者は断食の日を定めたといふ。碑文の外側は木の扉で覆われていた。その他、アラビヤ文字で書かれた碑石や、清の光緒二十七年（一九〇一）に立てられた「前掌教海公潔泉德行碑記」と名づけられた碑刻もあつた。

子に坐らされた。その椅子には鷹とこうもり、桃などが彫られているが、それらは英雄、長寿、福祿などをあらわすもので、この椅子に坐ればそれらの福德が得られるとのことであった。

前大殿の後ろには石門があり、ついで鳳凰亭がある。鳳凰亭の扁額には「一真」と書かれ、唯一の神であるアラーの神を意味するといふ。

鳳凰亭から美しくよく手入され、さまざま花や木が植

えられている庭を進むと、小さな階段があり、それをあがると石門がある。この石門をくぐると、目の前に巨大な礼拝殿（朝陽殿）が屹立している。礼拝殿の前庭の左右には石門があり、その背後には大照壁が聳えたつていて。礼拝殿の扁額には「臨下有赫」と書かれていた。「赫」という字は普通の意味でなく、慈悲をあらわす文字であるといふ。礼拝者は神から慈悲を受けられるといふ。

この礼拝殿の屋根瓦は琉璃瓦である。琉璃瓦は普通は使用できないが、国王の勅建寺であるため、これを使用することができます。礼拝殿はイスラム教徒が礼拝するための大殿である。靴をぬいで中へ入ると、イスラム教の寺院であるから、内部には何一つ置かれていない。一番奥の密殿にある神壇は、まさしくイスラム教のものであり、藻井の図案は、『コーラン』の説話を図で書いたものだといふ。驚いたことには、礼拝殿の内部の壁には『コーラン』が刻されていることである。今年の末には『コーラン』全部がこの壁に彫られ、その下段には漢訳された『コーラン』も彫られるといふ。まさしく現在のイスラム教寺院の一大事業である。

二 咸陽市及びその周辺

咸陽博物館

咸陽博物館は昔の文廟である。漢兵馬俑館、西漢帝陵文物陳列館などが主たる展示館である。咸陽文物古跡分布図があり、咸陽周辺の文物地図がかかげられていた。咸陽市には漢陵、漢長陵、李暁墓、順陵、千仏鉄塔などの歴史文物がある。

漢代のものが主であるために仏教文物はほとんどない。わざかに庭に明の万曆年間（一五七三—一六一七）の仏像があるだけである。それは咸陽市北杜郷から出土した釈迦仏像である。銅製の仏像は二メートルぐらいのものであった。

周至県 八雲塔

周至県城の城外西南角にある、西安市の小雁塔とよく似た樓閣式磚塔である。正式の名は瑞光寺塔である。基層に八雲の模様があるので八雲塔といわれた。現在の高さは三〇メートルあまり、もとは十一層四二メートルあつたとい

う。中心が土であるため塼表土心塔といわれる。碑石はない。周囲は住宅であるが管理事務所がある。

李所長の談話によると、瑞光寺は唐代の大寺であり、唐の景龍二年（七〇八）に創建、廢寺になつた年代は不明のことである。

この塔の特色は密檐式と樓閣式とが結合した点にあると。下部の五層は斗拱や柱があるから樓閣式であり、上の六層は密檐式である。基層の各面の壁に二つの雲の形があり、方角四面のため、全部で八つの雲があるので八雲塔といわれる。説明書には、

毎面両処雲状痕跡、故称八雲塔。

と書かれていた。塔内にもとは楼梯があつたが、一九一二年の農民起義によつて破壊されたという。塔は東に一・五メートル、北に〇・五七メートル傾斜しており、現在、周至県において修復中といわれる。

盧県 草堂寺

盧県城東南二〇キロの圭峰山の北麓にある。創建年代は不明であるが、後秦の姚興の建てた鳩摩羅什の翻訳道場で

あつた逍遙園の中に寺院が建てられたのが源流であるといわれている。唐代に、華嚴宗の宗密が重修して栖禪寺と名づけた。唐代以後、建造物は兵火のため焼尽した。

門を入れると樹木に囲まれた参道があり、左側に亭があり、

その中に唐の大中九年（八五五）に立てられた「唐故圭主

峯定慧禪師伝法碑」がある。碑亭の後ろの空地には、日本

の日蓮宗の寄附で建てる予定の鳩摩羅什記念堂の敷地がある。山門には「草堂古寺」の扁額がかかげられ、その右には草堂寺の説明の立札がたっている。

山門を入れると正面に大殿が、東西に配房がある。山門の両側には二十余りの石を壁にはめ込んだ回廊がある。詩人の詩文や、寺院の歴史が書かれたものである。

大殿の傍の門を出ると花園に囲まれた六角の塔亭がある。

そのなかにあるのが姚秦三藏法師鳩摩羅什之舍利塔である。高さ二・三三メートル、八面十二層の大理石でできた塔である。石の色が磚青、玉白、乳黄、淡紅色を呈しているため八宝玉石塔とも呼ばれている。塔の下層には浮雕の須弥山座、三層の雲台、蔓草の花紋がある。八角形の龕の屋蓋の上には浮彫りされた円珠があり、屋蓋の下には陽刻した

仏像などがある。

塔の前に小さな井戸がある。傍に二本の柏の樹があるため「二柏一眼井」と呼ばれている。塔の後ろの竹林中にも井戸があり、秋冬の早朝に井戸の中から煙霧がたちのぼるために、煙霧井と呼ばれている。

三 扶風県

法門寺

扶風県の北一〇キロの法門鎮に位置する。法門寺を有名

にしたのは、何よりも仏の舍利指骨の発見である。法門寺の仏舍利奉迎と、舍利指骨ならびに文物の発見についてはすでに紹介したのでそれにゆづる。（拙稿「法門寺文物考」藤田宏達博士頌寿記念『仏教思想論集』平成二年）

法門寺の塔は、高さ八四メートル、十三層である。第一層の題額には、「真身宝塔」の四字が鮮やかにみられる。一九八九年十一月九日、法門寺記念館の公開にあたり寺院が整備され絢爛たる伽藍となり、周囲の環境も立派にとのい、宿泊施設まで完備されるに至った。

門を入れると拝殿があり、拝殿の後ろに聳え立っているの

中国における仏教の伝播経路に関する実態調査（鎌田）

が真身宝塔である。塔の両側には鐘樓と鼓樓とがあり、正面奥には大雄宝殿がある。殿の前には宋の太平興國三年（九七八）の浴室靈異記刻石と、清の光緒十年（一八八四）重修の法門寺碑とがある。塔の中へ入ると、舍利指骨の模型の入った函がもとあつた場所におさめられている。地下宮殿内には仏舍利が祀られ、仏舍利発見当時の地下宮殿の模様などが図示され、拝観者に容易に理解できるようになっている。

華嚴宗の大成者法藏と法門寺の舍利奉迎、法門寺における燃指供養については、すでに発表（拙稿「賢首大師法藏と法門寺」『印仏研』第七二号）したのでそれにゆづりたいが、この度調査で靈帳を見ることができた。その説明文はつぎの通りである。

靈帳原景地宮中、靈掘上蓋内部記載、大唐景竜二年歲次戊申二月乙卯朔十五日、沙門法藏等造白石靈帳一鋪

以其時舍利入塔、故書記之。

ここで重要なのは、華嚴宗の法藏が景竜二年（七〇八）二月十五日、白石靈帳一鋪を造り、それを舍利入塔のときに行法門寺の地下宮殿のなかにおさめたことである。仏舍利

を長安と洛陽に奉安し、それをふたたび法門寺に返しに行つたとき、白石靈帳を造つてそれを舍利とともに地下宮殿に奉納したのである。現在、法藏の造つた漢白玉の靈帳が地下宮殿の左の隅に保存されている。

ちなみに法藏は白玉石の菩薩像座も作っている。それは長安県の華嚴寺址から発掘されたもので現在、陝西省博物館（碑林）に保存されている。この白玉菩薩像座は神竜二年（七〇六）に造られたものである。重要なのは、白玉菩薩像座の周りに人面があり、獅子と石を肩にかついだ力士像があることである。法門寺の靈帳との関係でもつとも重要なのは人面である。何故ならば、法門寺の靈帳にも、碑林所蔵の白玉菩薩像座とまったく同じような人面像が刻されているからである。景竜二年（七〇八）と神竜二年（七〇六）と年代は異なるが、同じく法藏の造像であることは明らかである。

従来、華嚴宗の法藏の伝記については、『宋高僧伝』をはじめとしていくつかあり、それによつて法藏の傳をたててきたが、それは法藏の一面を伝えるものにすぎない。法藏の教理学者としての勝れた側面が述べられているにすぎ

ず、造像者としての法藏の側面が見落されている。今後、法門寺の靈帳と、陝西省博物館所蔵の法藏造菩薩座像を通して、造像者としての法藏の一侧面を明らかにする必要がある。法門寺靈帳の学術調査がその一端を解明できる手がかりを与えてくれたのである。

法門寺博物館長の韓金科先生の話では、法門寺文物の発見はまつたくの偶然であつたが、研究はこれからであるとのことである。

四 岐 山 県

太平寺宋塔

八時、法門寺賓館出発、一路、扶風県より岐山県に向う。延々と麦畠がつづく。麦畠の中に時たま大根などの野菜畠がある。空はどんよりと曇り、まつたく日光がささない。

西安に着いてから連日この天氣である。恐らく時期的にそのような季節であるのかも知れない。約一時間かかる岐山県の県城に入る。県城内の西街にあるのが太平寺宋塔である。塔は職業学校の校庭にある。

校門を入ると目に着くのが巨大な磚塔であった。この塔

は八角八層の樓閣式の磚塔であり、高さは二八・二メートルといわれる。樓閣式の塔としては典型的な形態をしている。樓閣式の木塔を模して作った磚塔であることがわかる。第一層の基壇は比較的に高く、ほとんど装飾がない。第一層からは樓閣式の塔らしく、窓や欄干があり、檐の下は一段の斗拱で飾られている。第二層の塔身の下には平座が設けられている。第三層以上には仮の平座が作られている。平座の下の斗拱は檐の下の斗拱に比較して二組多くなっている。塔身の斗拱は密檐式である。

現在はすでにないが、民国二二年（一九三三）に「改修太平寺碑記」が建立された。この碑文によるところ塔は唐の元和七年（八一二）に建立されたといわれる。しかし、現在の塔は宋の元祐二年（一〇八七）に再建されたもので、太平塔と呼ばれた。それは太平寺の境内に建立された塔であるからである。この塔は高度な技術で建立されているため地震に強い。明の嘉靖三四年（一五五五）に關中大地震が発生したが、そのときも無事であったといわれる。最近、ゆがみが生じたので修復したという。

關中地区には多くの塔があるが、宋代に建立された塔は

中国における仏教の伝播経路に関する実態調査（鎌田）

少ないので、この太平寺塔は重要な意味を有する。この塔の第三層までは登ることができが、第四層以上に登ることはできない。説明はこの塔を専門に研究しておられる小学校の先生がしてくれた。

五 麟遊県

慈禪寺石窟

岐山県城を出発した社会科学院の車は、ふたたび扶風県方向に同じ道を戻り、途中で扶風県城へ行く道と別れて左折し、一路麟遊県を目指した。祝家庄から杜城、掘山溝を通り過ぎると次第に山道にかかる。道路の左側は断崖となり、下には渓流が流れている。ここは有名な岐山山系なのである。岐山山系には一六七五メートルの東掘山、一六五メートルの西掘山や、さらに北には一六二七メートルの掘山梁などが屹立している。

麟遊県を流れる杜水と澄水が合流して漆水となり、漆水が几字形に大きく湾曲してから東南に向って流れる。ちょうど几字形に河が湾曲した西南の岸上にあるのが慈禪寺石窟である。一九五七年、陝西省人民政府はこの慈禪寺石窟を陝西省の重点文物保護単位に指定した。

慈禪寺石窟は麟遊県招待所から西南へ約二・五キロ行つたところにある。ところで麟遊県とはどのような県であるのか簡単に紹介しておく。麟遊県は陝西省の関中西部にあり、行政区画としては宝鸡市に属している。東は永寿県、

漆水に臨んで造られた慈禪寺石窟は、前を流れる清流と周囲の山の樹木とあい和して静寂な幽邃境を呈している。

六 永寿塔

永寿塔は永寿県城にある。県城そのものが黄土高原の上にあるためかなりな高度になると思われるが、永寿塔はさらに高原の丘の上にあるので、かなり高い場所である。丘へ登る道をしばらく行くと、永寿塔が陝西省の重点文物に指定されていることを示す石碑がある。

石碑の前を通り、門に入ると畠の中に一つの碑石が見える。その碑石は「重修武陵寺碑記」と呼ばれるもので、清の道光十一年（一八三一）に建立されたものである。その碑文には「明張朝經遊武陵山記」と題するものが引用されている。この重修碑による限り永寿塔が何時建立されたのかは明らかではない。

この塔は四層塔である。各層に密な斗栱があり、下部には欄干がある。欄干にはさまざまな文様が画かれている。八角塔の各面には仮窓が二つづつつけてある。窓枠は岐山県の大平寺塔が横になっているのに対して、この永寿塔では縦わくなっている。第一層も第二層以上と同じように

柱と窓がある様式であつたかも知れないが、重修のときに取り除かれて現在あるような、ただ練瓦を重ねただけのものになってしまったと思われる。

この塔もまた典型的な楼閣式の塔であり、木塔の様式をそのまま模したものである。形から受ける全体的な感じは有名な応県の木塔と似ていて、ただ応県木塔に較べて細長い結構をもつていて点が異なるようである。

陝西省社会科学院歴史研究所の陳景富先生の話では、この永寿塔についての記録が、『永寿県志』に出ているそうである。それには一つの説話が述べられている。明代に一人の僧が金陵へ行き明の太祖に面会したとき、明の太祖より綾絹を頂いて帰り、その綾絹を武陵寺に奉呈したので「綾」という字と発音が同じ「陵」という字をつけて、寺名を武陵寺としたという。『県志』によると武陵寺は北魏の時代に創建されたといわれるが、実際は不明である。

七 檺塔

彬県県城の招待所のすぐ近くの紫微山の山麓にあるのが

彬塔である。紫微山はそれほど高くはない丘であるが、彬塔の背景としてはふさわしい山である。

彬県塔は前の文化財指定の標識には彬塔と書いてあつたので以下、彬塔と記す。彬塔は八角七層の樓閣式磚塔で、木塔を模したものである。各層にはアーチ形の門洞と長方形の仮門がある。各檐の上の階段には精巧にできた曲尺形の欄干があり、壯麗な感じを与えてくれる。塔内にはもどは階段があつたが今は何もなく中空である。

この彬塔が他の塔と異なるのは、斗栱の上に螭首がつけられ、螭首に風鐸がさげられていることである。また窓の縦の柱が太めであり窓も大きい。各層の一面には四本の柱がある。これらの柱が他の塔と異なるのは、他の塔が柱を表現する縦形の線であるだけなのに対し、この塔の柱は磚が横に重ねられて造られていることである。

この塔は基台の蓮華座に書かれた題記によつて北宋の皇祐五年（一〇五三）に建立されたものといわれている。『彬県志』の記載では大仏寺の建立のとき監督にあつた尉遲敬徳が貞觀の初めに建立したといわれ「開元古塔」などともいわれたが、現在のこの塔は、北宋のものといわれ

ている。陝西省社会科学院歴史研究所の暢耀先生の説では、北宋のものは斗栱が大きく、南宋のものは斗栱が少さいけれども複雑になつてゐることである。この原理を永寿塔と彬塔にあてはめてみると、永寿塔の斗栱が少さいけれども複雑な構造をしてゐるのは、宋代と文化財保護の石碑には書いてはあつたが、まさしく南京の建立である可能性が強いと思われる。

大 仏 寺

彬県大仏寺の原名は慶寿寺であり、彬県県城の西一〇キロのところにある清涼山の麓に位置する。寺院は北に面し、涇河の岸に臨接している。この大仏寺のある地点は、シルクロードにあたるところで、現在は西蘭公路が通つていて、

大仏寺は唐の貞觀二年（六二八、貞觀三年説もある）に建立されたが現在なお適切に保存されている。管理事務所の所長の話によると、排水がよくないので排水工事を実施しなければならず、また大仏が少しく前に傾いているのを補強しなければならないとのことである。

伝説によると、唐の太宗李世民が母の為に造像し、寺院

を建立しようと発願し、尉遲敬徳が監督して建造したのが大仏寺であるといわれる。唐代に貴族、官人、僧侶たちが造像して拡大し、今日見るような大仏寺が完成したといわれる。

大仏寺石窟は、大仏窟、仏・羅漢洞、千仏洞、応福寺の四つの部分からなり立っている。仏窟と石閣はあわせて一三六窟、仏龕は四四〇余り、大小の造像は一六八〇余体ある。そのほか碑石七、石碑一二、壁刻と題記が七〇余りある。また石獣が六頭、明代の鉄鐘が一つ境内にある。

最大の造像は大仏であり、高さ二〇メートルあるが、最小のものはわずかに一〇センチメートルほどである。大仏洞の前の殿楼の高さは四〇メートル、山を背にして建つているその景観はまことに美しく古代建築の一つとしての価値は高い。游客が頂上の楼上に登ると、涇河が一望の下に見られる。

八 長 武 県 昭 仁 寺

長武県城内の東街路の北に位置する。城北の水溝である

中国における仏教の伝播経路に関する実態調査（鎌田）

浅水原からの長い間の浸水によって寺院の建物は移転されたりした。この昭仁寺は唐の貞觀年間（六二七—六四九）太宗李世民が薛仁果と戦い、やっと勝利をおさめたが、この時の戦没者の靈を慰めるために建てたのがこの昭仁寺である。

門を入ると立派な碑石が見える。これが「幽州昭仁寺碑」である。唐の朱子奢が撰文したものであるが、書者は伝説では有名な書家の虞世南であるといわれている。この碑文の書体は秀麗かつ剛健であるという。

碑亭のそばを通つて小さな階段を登ると、正面に大雄殿が見える。これが有名な「昭仁寺大殿」である。私はこの大雄殿を一目見たとき、山西省五台山の南禪寺大殿を思ひだした。あまりにもその外観の構造が似ているためである。この唐代の建造物の流れは、五台山南禪寺を経て、韓国の中古の佛教建造物の一つといわれる慶尚北道の鳳停寺極樂殿へと継承していくのである（拙著『韓國古寺巡礼』新羅編、日本放送出版協会、参照）。

昭仁寺の門前には、

「一九八八年一月一八日公布、全国重点文物保护单位、

昭仁寺大殿、唐、中華人民共和国國務院」

と書かれた立札が立つており、この大雄殿が中国の国宝級の建造物であることがわかる。

昭仁寺博物館長の説明によると、唐の貞觀二年（六二一八）太宗李世民は戦死者を供養するために、慈福寺の跡にこの昭仁寺を造営したという。慈福寺は、北魏の太和年間（四七七—四九九）に建立されたものといわれる。もともと、この大雄殿は現在の位置から数キロ離れたところにあったが、昔、碑亭であった現在地に移されたものだという。唐の貞觀以前のこととは文献に記載がまったくないので不明とのことである。

大雄殿のなかの仏像は、プロ文革のときにすべて破壊され、現在は長武県城附近で出土した文物の展示室になつてゐる。その中には、上孟村秦國墓葬分布図がかかけられ一号墓、一七号墓、二六号墓などの墓からの出土品があつた。

この大雄殿を有名にしたのは、屋根を支える柱が一本もないこと、天井の梁の構造が特異であることである。中國語で「一担挑八角」と呼ばれる原理は、ばけつを担ぐ天坪

棒の原理によつて、一隅に二本の角材が十文字に組みあわされ、四隅で八本の角材が使用されて天井の梁の部分を支えていることである。それは外観は似てゐるが、五台山南禪寺の大殿の天井の構造とはまったく異つたものである。

大雄殿を前から見ると、両側の壁には二つの窓がとりつけられ、正面には「大雄殿」と書かれた扁額がとりつけられている。入口の格子戸のような両扉には風趣がある。七組の斗栱が見える。

大雄殿を出た右側には石刻資料室がある。北魏から北周、唐にかけての石刻資料が無難作に並べてあつた。年号が明らかなものに北周天和三年（五六八）の造像のための墓縁碑などがあつた。寺の創建に関する太和という年号について注意する必要があるのは北魏の太和と、唐の大和がまちがい易いということである。仏像で圧倒的に多いのは三尊佛であり、唐代の一仏二弟子二菩薩の様式はほとんどなかつた。隋代の仏像が二体あつた。

帰路、長武県から彬県県城へ行く途中に花朶山という民間信仰の廟があつたので立ち寄つた。この岩山には多くの窟龕がうがたれており、もともとは仏教の摩崖造像があつ

た仏教窟であることは明らかである。現在は齊天大帝などが祀られた道教廟になつており「有求必應」などの現世利益を示す文字が赤い布切れに書かれていた。

九 涼陽 県

崇文塔

涇陽県の南方一〇キロ、永樂店にあるのが崇文塔である。塔身十三層、高さ八一・七メートルある。塔形は八角形、

密檐式で、すべて青磚を用いて建造している。第一層の各

辺は長さ九メートルある。南面した門楣の上に「崇文宝塔」

の四字が刻されている。各層には四つの窓があり、四つの仏龕が作られ、仏龕の中には明代の石刻仏像が置かれている。第一層の仏像は四体ともに頭部が欠けている。これらの仏像の形態はそれぞれ異なつていて、迫真性のある勝れた仏像である。塔の下の碑石の記載によれば、明の万曆十九年（一五九一）、李世達（号は漸庵）が修造したといわれる。

この塔の北二キロには鐵仏寺があり、そこに鐵仏寺塔というのがあつたが、これを現在地に移したらしい。ところ

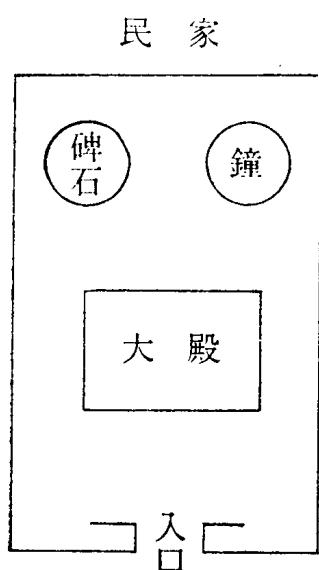
中国における仏教の伝播経路に関する実態調査（鎌田）

が明の嘉靖三四年（一五五五）この地方に大地震があり、その塔は倒壊した。そこで李世達が修造したといわれる。第九層まで修造した時、李世達が没したため、その娘が父の志を継承して修造し、十三層まで完成させたといわれる。竣工したのは明の万曆三三年（一六〇五）であった。

塔頂には薬瓶のような形の宝珠が置かれている。昔は蓮花があつたが今はない。この塔にはかつて美しい鎏金の仏像があつたが現存しない。

太壺寺

涇陽県の接待所から市場のあるにぎやかな通りを少し行って左へ曲ると、そこが太壺寺跡である。現在は図書館になつていて、その配置はつぎのようである。



中国における仏教の伝播経路に関する実態調査（鎌田）

大殿は明代のものであるが、屋根が反りかえった特異な形態をしている。

大殿の裏側には明代の大鐘がある。この大鐘の模様は特異であり、珍貴なものといえよう。大鐘の反対側の一隅に一つの碑石がある。それは「上都薦福寺臨壇大戒德律師碑文」である。徳律師は諡で、碑文によると名は智安（？）である。撰文は韓雲卿である。もともとこの碑石は涇陽県の東南の蔣劉村の寺院にあったものであるが、一九五八年に涇陽の太壺寺趾に移したものといわれる。

智安は涇陽県に両親が住み、この地で生まれたため涇陽県に葬られた。智安の没年は唐の太暦四年十二月二十九日であり、弟子の比丘尼徳超が太暦六年七月十五日に建碑した。碑文のなかに「構塔立像」という文字があるので塔と像が造られたらしいが、今はどちらもなく、ただ碑石が残っているだけである。智安が葬られた場所は、当時の唐の天子より「涇川仏寺」という名前を下賜されている。

碑石の左の側面には「和上遺戒」が刻され、右の側面には、上段に『般若心經』、下段には『仏說六門陀羅尼經』が刻されているが、ともに沙門玄奘の奉詔訳である。

この碑刻には、亭風の建物が建てられて碑石を保護しているが、すぐ傍らの民家の人が柱の間にひもをかけ、洗濯物を干していた。

十 高陵 県

三陽寺塔

高陵県城東南約一・五キロの高陵中学校の中にある。塔の結構から判断して宋代の建造といわれている。塔の下にある明の正徳十六年（一五二一）に建立された碑石によるところ、この塔はもとは昭慧院内に建てられた塔である。昭慧院の境内が涇陽、咸陽、渭陽の三陽地区の中心にあつたため、昭慧院は三陽寺と呼ばれ、塔もまた三陽寺塔と称せられた。

塔は八角十三層の密檐式の磚塔である。円形宝瓶式の塔頂がある。高さは五十三メートル。各層の東西南北の四面に券門があるが、その他の四面には門がない。

高陵中学の校門から真っ直ぐに行き、右へ曲って突きあたつたところに一軒の民家があるが、その家の前に明の正徳十六年（一五二一）十二月吉日に立石された「重修昭慧

院記」と書かれた碑石が庭に横になつたまま置かれていた。

社会科学院の先生方が入つて行くと、碑石の上で遊んでいた姉弟を母親が叱りつけ、すぐに碑石の上に置いてあつた物を取り除くように命じた。明代の碑石の上で子供が遊んでいるには驚いた。もう一つの欠けた部分しか残っていない碑石が校門のすぐ近くに無造作に置かれていた。

碑石を見て、家の庭から出て三陽寺塔の方を眺めると、塔は中学の校舎の上から天空に屹立し高く聳えていた。ふと、塔頂に動くものが見えたのでさらに近づいて見上げる第一層の入口を管理人である先生が、我々のために開けてくれたので、生徒が塔頂に登つたものと思われる。

この塔頂からは渭水の北の原野一帯が眺められるはずであり、涇河や渭水の流れも天気がよければ視界に入るはずである。この塔を遠方から見るとほとんど傾斜がない。千年の間には何度も地震があつたにちがいないのに、まったく傾斜したり、亀裂が入ることもなく屹立しているのはすばらしい。

十一 耀 縣 藥 王 山

耀県城東一・五キロに位置する藥王山は、唐代には磬玉山と呼ばれ、宋、金、元、明代には五台山と呼ばれた。一〇〇〇メートル前後の五一の小峰からできているため五台山というのである。山西省の五台山とまちがえやすい。

現存する金の大定九年（一一六九）に重刻された「耀州華原五台山孫真人祠記」や、明の喬世寧編『五台山志』には「東を瑞應台と曰い、南を起雲台と曰い、西を升仙台と曰い、北を顯化台と曰い、中を齊天台と曰う。五山対峙し、頂平なること台の如し」と記されている。

五台山を藥王山と称するようになったのは、唐の医学者孫思邈に、この山が関係があるからである。孫思邈は京兆華原（耀県）の人で『千金要方』を始めとして、多くの医学、薬学関係の書物を著わした人である。明の隆慶六年（一五七二）、彼の著書を五つの碑石に刻して山上に置いたため、それよりこの山は藥王山と称された。藥王山には多くの石刻や文化財があるので有名である。

中国における仏教の伝播経路に関する実態調査（鎌田）

博物館長の説明によると、この薬王山は南北朝時代までは仏教聖地であったが、唐になって孫思邈が薬方の神様として崇敬されるようになり、永淳元年（六八二）に彼が没すると南庵に廟が建てられた。その後、薬王山は道教の聖地となり、さらに唐の会昌法難で仏教が断圧されると、仏教は衰退、宋元、明清時代には薬王山は道教の聖地となつた。このような変遷を経た薬王山は「仏道一山」とか「仏道両立」と呼ばれるようになつた。

現存する摩崖造像は純粹な仏教像であり、薬王山は今もなお「仏道両立」の形態を保つてゐるのである。

薬王山に登るには、まず石碑坊の側を通らなければならない。参拝道には線香を参拝客に売る老婆が沢山いた。廟会のためか、土産品売り場や、サークス、見せもの、占師などが道路のわきに店を開きし、占師や曲芸の前には人々が密集していた。入場券を購入して石段をあがると、觀音娘娘を祀った小さな祠堂があり、そこには道士が一人おり、人々の求めに応じて祈禱をするようであつた。

薬王山に入るには急な階段を上らなければならない。途中に「五台山」と書かれた碑石があり、さらに薄暗い急な

階段を登りきつたところが献亭である。石獅子が守つてゐるような献亭のあたりは、線香の煙りと雜踏する人々でいっぱいであつた。

薬王廟は階段を登らず、石彫臥虎を見ながら左側の坂道を登り、右に曲つて行くと小さな洞があり、その階段を上ると洗浴池に出る。さらに上つて門をくぐると、そこが薬王廟である。

薬王廟の碑亭の前にあるのが太玄洞（薬王洞）である。これは遜思邈が竜王からもらつた洞といわれ、入口側から線香をたくと、長い洞窟を通つて出口に煙りが出るとのことである。道教の道士はこの洞窟で生活しているとのことである。

太玄洞の前の薬王殿の真中には薬王孫思邈の神像が安置されていた。一九七九年に修復したとき、顔に色を塗つたとのことである。六本の長い鬚を生やした薬王は医学の秀でた英智と、悩める人々を救う慈愛のまなざしをしていた。廟殿の右側の壁には「有求必應」と書かれた現世利益の赤い布が貼りつけてあつた。薬王の背後には松の木と鶴の彫刻があり、松と鶴は長寿延命をあらわすためだという。

廟殿を出てみると、線香の煙りが大きな香炉からもうもう立ちのぼり、群衆がその火のまわりに集っていた。その側には遜思邈の著書である『千金方要』の全文が碑石にぎっしりと彫られていた。現存する漢方の碑石としても最も古いものといわれる。明の隆慶六年（一五七二）のもといわれる。

碑石のすぐ前には十大名医殿がある。岐伯、扁鵲、葛洪、陶弘景など十人の中国の名医の塑像が殿内に祀られている。十大名医の塑像を見てから右へ行くと、「神嗣禱應」と書かれた門があり、その背後に多くの医学者を讃えるための碑があった。新しいもののようにあるが数多く林立しているため壯觀である。

藥王廟を出て山道を進むと、占師が道路に店開きをしておりたくさんの人々が群れていた。右側にある醉翁石と呼ばれる巨大な岩石を見ながらしばらく行き、送子廟と書かれた入口を通って階段を上ると碑林がある。

碑林の中でもっとも有名なのが張僧妙と姚伯多造像碑である。北魏のものであるが、書体もよく、北魏の碑に出る字が多く使用されているということである。自然石に彫つ

たものであることが特色だという。造像碑の上部に太上老君像と二人の供養人が彫られている。仏教の一仏二菩薩の形態を模したものと思われる。このほか北魏の始光一年（四二四）の朗（？）造像碑などもある。

この碑林で驚いたのは、仏道融合をあらわす造像碑を三体ぐらい見たことである。仏像と道像が二体並んでいるのである。仏道融合の実物が耀県にあることを知った。特にその造像年代が北周であることに興味をもつた。北周代の降魯造像碑を見ると、やはり仏教の仏像と道教の神像（道士か）とが並坐しており、仏道二教の混淆、融合を見事にあらわしていた。文物資料による仏道二教の融合の資料こそ、この藥王山石刻資料の中で宗教史研究の上でもっとも重要である。

北周といえば北周の武帝が廢仏を断行したことで有名であるが、この耀州地方では仏道二教が盛んであつたために、二教の像をそのまま祀つたという。仏教や道教の廃棄を皇帝が命令しても、民間では仏道二教をそのまま奉じていたのである。

中国における仏教の伝播経路に関する実態調査（鎌田）

たことである。この半跏思惟像は手の形態も美しく、姿態も細くすばらしいものであった。敦煌石窟や雲崗石窟の半跏思惟像はどちらかといえずんぐりした姿態であるのに對して、ここものは洗練された美しさをもつていた。私はこの半跏思惟像を見て、韓国のソウル国立中央博物館にはこの半跏思惟像を見て、韓国のソウル国立中央博物館にある有名な新羅の半跏思惟像を卒然として思い出したのである。新羅の半跏思惟像の源流がこの藥王山の石刻にあるかも知れない。

この半跏思惟像の背後の上部には飛天が彫られている。この飛天には後代のような天衣がない。ところで、半跏思惟像と飛天が彫られている造像碑の表面は、先に述べたように仏道二教の融合を示す二像並坐であり、その裏面に半跏思惟像が彫られているのである。仏道融合を示す降魯造像碑の裏面には一仏二菩薩が彫られており、まさしく仏教像なのである。しかし、側面は道士であり、やはり仏道二教の融合を目指した造像碑といえる。

この碑林にはそのほか仏教のみの造像碑、道教のみの造像碑もある。たとえば呂思顔造像碑は仏教だけのものである。

またこの碑林のなかには珍貴な道教の造像碑がある。前面に遊牧民族の信仰のシンボルであるのか○のような模様と、◎のような模様がついたものがあり、月と太陽のような天体をあらわすものかも知れない。背面には騎馬民族の競馬のようなもの、相撲のようなもの、車や馬が彫られて少数民族の習慣や宗教を示すものがあった。

そのほか仏教像だけの石刻の中には菩薩像だけが無数に彫られているのがあった。千仏塔にならえば、まさしく千菩薩塔ともいうべきものである。また別の石刻には北周の樓閣や庭園を示す浮彫があった。唐代の樓閣についてはすでに知られているが、北周の樓閣の構造を示す石刻資料はここだけしかないという。中国の古代建築研究史上、重要な資料を提供する。またある石刻には、供養人（あるいは比丘尼か）が香炉の一種である博山爐を持つているのがあつたが、果してこれが香爐かどうかには問題があるらしい。

碑林を出てさらに進むと馬に乗った老子像があり、すこし行くと仏教像のみがある摩崖造像館へ着く。この館へ入つて驚いた。まさしく摩崖仏の宝庫なのである。

一番右にあるのが初唐の観音像である。頭の髻が唐のものだという。次は弥勒菩薩像である。北周時代のもので顔は豊満で鼻が高く、少数民族の特徴を示して頭の頂上が平らである。脚は開いている。西魏の頃までは交脚と開脚がまじっていたが、北周にはいると交脚弥勒はほとんどなく、開脚になつてているという。

次にあるのは唐代の釈迦像である。脇侍菩薩二体を脇仏とした三尊仏である。主尊は半跏趺坐を組み、身体からは祥雲が出ている。この祥雲が六つあるので、王亞栄先生の説では六つの祥雲の上に獅子、犬、力士などがあるため、六道輪廻をあらわすものとされている。祥雲は敦煌の壁画にもよく見られるものである。

つきの摩崖像は唐代の観音像が二体である。この観音像は女体を思わすような妖艶な姿態をしており、腹部と腰が前にでているのが特徴である。右の観音像は左手に、左の観音像は右手に淨瓶を持ち、左右の均衡がよくとられている。

多くの中国の民衆が台座の上にのぼり、顔面、首、手足に手をふれては、自分の身体にさわっている仏像が一体あ

つた。これは金代に造像された半跏像である。頭には宝冠を着けている。右手が欠けているが、衣紋が長くたれさがり均整のとれた仏像である。この仏の右側には同じく金代の仏が脇仏のように小さく立っている。その右には四体の仏と、下に三体の小仏がある。摩崖造像の一一番左の方にあらわすものとされている。結跏趺坐をしており、台座には大きな竜が彫られている。左隅にあるのが薬師如来像である。薬師如来は右手に漢方の丸薬を、左手に薬盒を持っていて。両側には日光、月光の両菩薩が侍立している。その下には二人の供養人が彫られていた。明代の造像である。

薬師像の下には薬池が造られていた。薬池の右には薬をつぶす丸い穴があり、「拂薬」するところであるという。この穴はつぶした薬が流れこむように小さな溝が造られ、さらに薬池の左にも薬水が出るように小穴があけられた。信者は礼拝して一杯の水薬を頂くとのことである。

摩崖造像館からふたたび薬王廟に帰り、さらに二つの穴がある洗薬池を眺めながら、坂を下って、北院の反対側の丘の上にある南院へと車で向った。南院の丘にある亭に登

中国における仏教の伝播経路に関する実態調査（鎌田）

ると、遙かかなたに神徳寺塔が見えた。また左手の山道は、唐の李世民が薬王山を訪れた時、登ってきた道であると教えられた。谷をへだてて見える山の頂きが平らであるが、平台と呼ばれ、薬草や薬剤を取るところだという。

南院の北端にある魁星楼は文昌閣ともいわれ、文人墨客など教養人が集まり、詩を作り、政治を論議するところである。この魁星楼の下には大きな穴があけられ、そこに道

がついている。唐の太宗李世民がこの山を訪れたとき、通った道であるため御道と呼ばれている。李世民が孫思邈に号を受けた拝真壇のすぐ近くにある大きな古柏は、孫思邈の手植の柏樹といわれる。この柏樹は一二〇〇年の年代を経ているという。

沢山の人々が地方劇を見ている庭の側には、孫思邈の一生を書いた金代の碑石（宋の元豊碑（？）撰文）が立てられていて。また「咸德軍五台山静応廟額勅並加号妙応真人告祠」と書かれた碑石もあった。ちなみに妙応真人とは北宋の徽宗が孫思邈に賜った号なのである。そのほか徽宗の肉筆の碑や、亀や蛇の象形文字、明の正統十三年（一四四八）の「譚真君書」や、明代に再修された道教經典の一つ

である『昇玄鎖災經』の經文の石刻もある。

薬王山隋墓石刻陳列室には、一九八四年に発見された隋代の墓棺が展示されていた。石棺のほか、頭を欠いた四体の仏像などが発見されたため、この薬王山が南北朝から隋代にかけて仏教聖地であることが確認された。

十二 藍田県 水陸庵

藍田県城東一〇キロに位置する。秦嶺の悟真峪から流れ出た藍水が二つに分かれて流れ、水陸庵の周囲をめぐり、天然の小島のような環境にある。古代寺院と松柏とがあやなす最勝地でもある。唐代の詩人、白居易が「游悟真寺」という長詩をつくり、杜甫や王維もまた訪れ、作詩したところでもある。

水陸庵はもともとは、悟真寺を主とする仏寺の中の水陸殿であった。悟真寺の水陸殿は隋代に建てられたといわれるが、初唐に尉遲敬徳が監修して大寺院となり、淨影寺慧遠や淨土教の善導が住したりした。

明代に秦藩王、朱懷璫が藍田の山水を愛し、仏寺の復興

を念願し、明の嘉靖四十二年（一五六三）から隆慶元年（一五六七）の五年間にかけて水陸庵を重修した。そのとき名仏像師の喬仲超を招いて壁塑を雕造させ、水陸庵を家祠仏堂としたのである。かくして水陸庵が塑像の殿堂として第二の敦煌の名をほしいままにしたのである。

水陸庵の諸聖水陸殿の殿堂に入ると、すべての壁は塑像でおおわれていた。この塑像群は七つの部分に分けることができる。

第一の部分は正面の三世仏である。まん中は釈迦仏、両側には迦葉と阿難が立っている。背後の光背には、仏、菩薩、竜、象、大鳳などの塑像が造られていた。三つの帶は光りをあらわし、この釈迦は智拳印を結んでいた。須弥座の下には金剛力士がいる。

向つて右側には阿弥陀仏が結跏趺坐して禅定印を結んでいる。觀音と大勢至菩薩を従え、口には髭が生えている。向つて左側には藥師仏が日光、月光の二人の菩薩を従えていた。

第二の部分は、入口の左右両隅にある報身仏と應身仏である。右隅の報身仏は盧舍那佛、左隅の應身仏は釈迦の真

身で、中央の釈迦仏とともに三身仏といわれる。中央の釈迦仏は毘盧舍那法身仏であり、これが明代の三身仏の塑像であるといわれる。報身仏の華蓋の上には釈迦を中心とし老子と孔子の三尊の座像があり、これは儒道仏三教教主像と呼ばれている。南側の應身仏の華蓋の上には、華嚴三聖像がある。また四人の善財童子の塑像もある。

第三の部分は、中隔正壁の背面にある觀音、文殊、普賢像である。ところでここに觀音像にはひげがある。觀音は中国では普通は女性と考えられている。中国全土でひげのある男性の觀音像は、(1)敦煌の塑像、(2)河南省安陽の觀音、(3)水陸庵の觀音の三つであるといわれている。觀音は三十三身に應現するので、男性であっても女性であっても問題はない。この三菩薩の側には樓閣が築かれている。なお背後の壁塑には、善財童子五十三參といわれる善財童子の求道物語がある。左側には善財童子が立つており、右側には托塔李天王の次子の哪吒太子が立っている。

第四の部分は、中隔の正壁の左右両側の菩薩像である。向つて右側の前面には地藏菩薩が、その背面には十六臂觀音像がある。地藏菩薩は九頭の獅子の上にいる。この獅子

たちはさまざまな情報を集めて、地蔵菩薩に報告するのである。地蔵の右側に立っているのは閻魔大王である。普通の閻魔大王は目をいからしているが、この閻魔大王は、インテリ風である。左側は土地老（土地公）である。地蔵菩薩の背面にいるのが十六臂觀音である。觀音の背後には觀音菩薩の塑像が造られている。対面には蓮華文の雲様の上に菩薩の塑像がたくさんに造られているが、頭部の欠けているものなどが多い。

向って左の中隔の間に坐っているのが藥王菩薩である。藥王菩薩の前には、中国の歴史上の十大名医といわれる張仲景、華陀、扁鵲、葛洪、黃帝、雷公、皇甫謐、倉公、陶弘景、王叔和の像がある。藥王菩薩は手にひょうたんと藥函とを持っている。足もとには虎が一匹わだかまっている。藥王は昔、唐王の病氣を治すときに虎にのる習慣があつたので虎を従えているのである。この藥王菩薩の背面には孔雀靈王が坐っている。孔雀靈王の大きな羽の大部分は欠けている。孔雀の上に乗った孔雀靈王の頭の上には肉髻がみられる。

第五の部分は、南北壁、すなわち正面入口から向って右

と左の壁面の第二層の段にある五百羅漢渡海の塑像である。五百の実数には足りないけれども、塑像の様式からみて五百羅漢の渡海図であることは明らかである。羅漢の足もとには、渡海を祝う怪物の像も見える。また羅漢を背負つている勇健な人間像もある。

第六の部分は、南北両壁の最下層にある二十四諸天の塑像である。諸天の手は四本、六本など各種あり、金剛杵、ほこ、槍などさまざまな武器を持つており、その表情は豊かで二十四天ともそれぞれ異った顔をしている。それは勇壮そのものといつてもよい。その位置も三世仏の両側にて、その命令を聞く態勢にあることが明らかである。

第七の部分は、この水陸庵の塑像の中でも圧巻の部分である。それは南北壁、すなわち左右壁の第二層に属する部分で、仏伝の故事から題材をとったものである。向って右壁には仏の降生（誕生）を、左壁には仏の涅槃が主題とされている。付属として「以肉貿鵠」「捨身飼虎」「西方淨土變」のなかの經変の一部分をとつて造形しているところもある。仏の誕生についても、誕生した釈迦が、九頭の竜の口から水がそそがれて九竜浴する姿が、天上天下唯我獨尊を唱

えて、両手が天と地を指している姿などが、あたかも生きているかのようにならに造形されている。涅槃についても同じであり、頭を西に向けて横たわっている釈迦のまわりには十大弟子がはべっている。迦葉の如きは、釈迦は死んだので

はなくて涅槃に入ったのであるから、目出たいことだと思

い、嬉しい顔をしているのに対して、阿難は師との別れを悲しんで泣いており、その涙をぬぐっている弟子の姿が詳

細に造形されている。両側の天王は、釈迦の入滅を知り、手を持っていた武器を捨てて驚いた顔をしている。涅槃の塑像の上部には、鐘楼と鼓樓とが造られ、鐘楼の上には舍利塔があり、鼓樓の上には七層塔がある。

さらに建物の一番奥の西の檐牆の上に壁塑が造られていて、それは仏母が兜率天に往生する姿が造形化されている。

一九五七年、陝西省人民委員会は、水陸庵を陝西省の重要文物保護単位に指定した。水陸殿を出て右側にある展示室に入ると、水陸庵の塑像の説明が展示してあると同時に悟真寺についての記録がある。『藍田縣志』卷二〇によつて悟真寺のことが説明されている。また現存する悟真寺和

尚塔の写真もある。また、終南山藍田悟真寺釈慧遠（『続高僧伝』卷二三）、善導大師と悟真寺、隋終南山藍谷悟真寺釈淨業（『続高僧伝』卷十四）をはじめ、慧超（『続伝』卷三八）、法誠などの伝記が紹介されている。

唐の貞觀年間、尉遲敬德が悟真寺の規模を拡大し、當時、僧侶千人以上が住していたことが紹介されている。

また、悟真寺初建図がかかけられ、悟真寺は隋の文帝の開皇年間（五八一—五九一）に沙門淨業と法誠が創建したという。さらに唐代の悟真寺位置図があり、悟真寺は藍田県の東約十三キロの覆車山内に位置するという。唐代には終南山悟真寺、あるいは藍谷悟真寺といわれた。終南山系の藍関から峪口に至る峡谷地帯を悟真峪と称したという。覆車山上の悟真寺は、悟真峪南普陀上悟真寺といわれ、悟真峪の横の山嶺上にある華嚴堂を悟真峪北普陀下悟真寺と称した。華嚴堂が下悟真寺なのである。その下悟真寺の一つの殿堂が水陸殿なのである。

悟真寺は水陸庵から見える山嶺を越えたところにあるといわれる。悟真寺と水陸庵については稿を改めて論じることにする。

中国における仏教の伝播経路に関する実態調査（鎌田）

十三 韓城市

司馬遷墓

韓城市城南一〇キロの芝川鎮南門外の黄河西岸の梁山東麓に、有名な『史記』の著書、西漢の史学者司馬遷の墓がある。

牌門に着くと、梁山を背にした堂々たる廟宇が見える。断崖、峭壁の上に点在する廟宇は堂々たるものである。

牌門の扁額には「漢太史司馬祠」と書かれていた。この墓と廟は四つの高台から成り立っている。まず第一の高台に行くと、たくさんの古碑が林立している。第二の高台にも殿宇があり、展示物が飾られている。第三の高台に行くには坂を登らなければならない。

第三の高台の牌坊の上には「河山之陽」という文字が見える。司馬遷の自伝のなかに「耕牧河山之陽」という文字があるので、そのなかから探つたものである。司馬遷は幼時、竜門山の南の黄河の岸にある高門原といわれるところで、耕牧して成長したのである。第三の高台には祠廟の正殿がある。正殿の中には司馬遷の塑像が祀られている。最

上層の高台にあるのが、司馬遷の墓である。墓は円形で元代に修建したものである。墓前には清の乾隆年間に書かれた「漢太史公墓」の墓碑がある。墓のまわりには古柏が五本植えられて趣きをそえている。

正殿のある高台から遙か下に黄河の流れが見える。竜門の滝を突破した大黄河の奔流が一気に幅を広げるところである。その雄大な景観は他では見ることができない。

一九五七年、祠廟と墓が重修され、竣工後、郭沫若氏が詩文を作り、太史公を讃えた。一九八二年、全国重点文物保护单位に指定された。

円覚寺

現在は韓城市烈士陵園になつていて、烈士紀念建造物ということで、一九八八年五月、陝西省人民政府の文物重点保護単位に指定されている。

円覚寺は唐代に建立、宋の咸平元年（九九八）に重修されたという。明の成化九年（一四七三）造の寺内の大鐘には「開化寺」と刻されているので、明代にこの寺は開化寺と呼ばれていたことが明らかである。大鐘の銘文には、

韓城県開化寺鋳鐘募縁文

とある。

円覺寺にはもう一つ大鐘がある。銘文には円覺禪院受業僧とあり、何人かの僧の名前があげられ、また大乘、戒律、教義沙門として澄瀾、広高、広寧、定康などの名前が見られる。この鐘は大金、承安四年（一一九九）のものといわれる。鐘には円覺禪院と書かれており、この寺が金代には円覺禪院と呼称されたことが明らかである。

大殿の前には、円覺寺塔がある。この塔は金の大定一三年（一一七三）に建立されたものである。七層八角の密檐式の真空塔で、塔の第一層に銘文がある。

陝西省の仏教文物のなかに金代のものがあることは重要な意味をもつ。金代の仏教史を考えるとき、陝西省にまで金の政治権力が及び仏教文物が造られたことになる。しかし、陝西省には遼代のものはほとんどない。遼代には陝西省まで遼の支配が及ばなかった証拠である。

この円覺寺古塔を一九五七年五月三十一日韓城県人民政府は陝西省の重點文物保護単位に指定した。

文廟

文廟は現在、韓城県博物館になっている。文廟の入口には「下馬止」の碑石が二つあり、碑石の側には生きた馬がつないであり、文武両官が昔、ここで下馬したことが明らかにされている。

入口の門には、「賢門」「聖域」と書かれており、ここが儒学の聖人の境域であることが明らかにされている。門を入れるとすぐ右に元代の五竜壁があり、大きな竜が五匹浮彫にされている。竜といえば牌門の斗棋の中心にも竜が造られていていた。門の入口には二頭の「狴犴」が彫られていた。これは門の守護神なのである。門の背後には「文廟」と書かれた扁額がかかけられていた。

牌門を入ると何本もの古柏樹が聳える静かな境域が開ける。多くの「修學碑」などの碑刻が立ち並び、その伝統の重さを感じさせる。

第二門の入口の左側の壁には韓城県の名勝古蹟の地図があり、右側の壁には代表的な觀光地である普照寺、文廟、竜門、石門、司馬遷祠墓などの説明と写真がつけられていて

た。

ちなみに普照寺についての説明には、韓城市的東北約一キロの咎村郷呉村寨の南に位置する寺で、元代に創建され、清代に重修された寺であるという。この寺には五体の泥質彩塑の仏像があり、韓城市では最古の芸術作品であると記載されていた。

戦門を入ると大成殿が見える。門の左右の壁には「重修大成殿碑記」などがある。大成殿の中には、種々の文化財が展示されていた。

大成殿を出て左側の「東碑林」と書いてある石刻資料室へ入ると、さすがに博物館であるためか、多くの石刻仏像が展示してあった。一番右端には二メートルぐらいの唐の仏像があり、石刻柱型浮彫、仮の頭部、浮彫石刻など北魏から唐代にかけての仏像があった。

驚いたことには、釈迦、文殊、普賢の三尊仏があり、時代は隋代ということである。文殊菩薩は如意棒？のようなものを左手に持っていた。この三体仏は王峰郷趙家溝より出土したことである。文殊、普賢の二菩薩を脇侍菩薩とした三体仏は唐の中頃から多く見られるものであるが、

隋代にあるというのは珍らしく、貴重である。この隋代の普賢菩薩の象の形態が珍らしい。大へんに鼻が長く、しかも象の形態が細身だということである。唐代の象と比較するといちじるしい相違がある。

このほか、石仏寺にあつた唐代の観音立像や、隋代の石刻柱型浮彫などが展示されていた。柱型浮彫の正面は、最上段に燃燈仏と思われる一尊があり、中段と下段には、釈迦三尊と思われる一仏二菩薩が浮彫されていた。側面は左右両面ともに一仏が縦に上から三段に並んで彫られていた。また、隋代の浮彫石刻には二仏並座のものもあり、この石刻資料室はまさしく仏教彫刻の宝庫である。

さらに韓城市的円覚寺が一時期、開化寺と呼ばれたことを証明する「石刻重修開化寺碑記」があった。この碑記は宋の太平興國九年（九八四）に書かれたものでそのなかには明らかに「開化寺」の三文字を読みとることができた。